

HUMAN RIGHTS

人権・同和教育だより
第 2 号
平成 27 年 8 月 31 日発行

*「HUMAN RIGHTS」(ヒューマン ライツ)とは「人権」という意味です。

1 人権・同和教育講演会と人権紙芝居について

7月10日(金曜日)、5・6時間日本校で1年生は人権紙芝居、2、3年生は人権・同和教育講演会が実施されました。その様子を以下でお伝えしたいと思います。

① 1年生 人権紙芝居 道前育成園さん

1年生は人権・同和教育ホームルームで、「人権問題を考える」をテーマに学習しています。その人権学習の一環として障がい者の人権問題にテーマをしぼり、障がい者支援施設道前育成園の方をお招きして、お話をさせていただきました。

前半は、「ケイコさんのこと」という、知的障がいを持って生まれたケイコさんの成長していく過程を描いた人権紙芝居を観ました。後半は、道前育成園の施設、入所者の方々の日常生活や仕事の様子などをスライドで紹介いただきました。

障がいを持った人が社会の中でうまく生活するためには、本人が努力するだけでなく、まわりの私たちが受け入れたり、認め合ったりすることが大切であるということがわかりました。また、「ノーマライゼーション」についても考える良い機会となりました。



② 2年生 講演会 「人権獲得の歴史から学ぶ」 講師 土居高等学校 教頭 森 昭彦先生

愛媛県立土居高等学校の森昭彦教頭先生を講師にお招きして、「人権獲得の歴史から学ぶ」という演題で、「人権・同和教育講演会」を実施しました。

講演では、人権・同和教育を学習する目的、中世の社会的差別、近世の政治的差別、1871年の「解放令」などについてお話をさせていただきました。生徒は真剣な態度で、講師の森先生のお話を聞いていました。

講演会後は、各ホームルーム教室で感想文を書き、講演



会を振り返りました。また、各ホームルームの人権委員は、講演会後の座談会で森先生に質問をしたり、意見交換をしたりして、人権・同和教育について学習を深めました。

森先生が講演会の最後にお話しされた、「差別の現実学ぶ」こと「被差別の立場に立つ」ことを意識して、より一層人権意識を高め、今後の人権・同和教育の活動に生かしていきたいと思えます。

③ 3年生 講演会 「幸せな結婚のために」

講師 愛媛県人権対策協議会 西条支部長 原田 保一さん
西条高等学校 教諭 田窪 健三先生

前半は原田さんの結婚差別に関するお話でした。ご自分の体験談だけでなく、差別から逃げず周りを説得して、人々の考えを変えることができた事例も紹介してくださいました。また昨年度実施された西条市における人権に関する市民の意識調査についても合わせてお話をしていただきました。

後半は田窪先生が結婚ということについて、身近な話題をもとに話をされました。

結婚差別の現状を知るだけでなく、改めて同和教育について考える機会になったと思います。



④ 生徒の感想

1部になります。以上の学習での感想を載せたいと思います。

1年生

人権紙芝居を見て、改めて障がいを持つということを考えることができました。障がいを持つ本人やその家族の気持ちを、全部分かるわけではないけれど、紙芝居の中の表現で少しだけ分かることができました。印象に残った言葉は「障がいのあるのは誰のせいでもなくて、まして本人のせいではない」という言葉です。私も気付かないうちに間違った考え方を持つようになっていくかもしれないので、よく考えて正しいことを知るようにしたいです。

2年生

私は、差別は、歴史から生まれたものだと思いますが、たくさんの人の誤った考え方や理解の仕方、勘違いからも生まれていると思います。だったら正しい考え方を身に付け理解し、誤った考え方を直すことが大切だと思います。私は、水平社運動に関わった人が小松町にいることを知りませんでした。だから、水平社運動に関わった林田哲雄さんのことも知りたいです。

3年生

どんなに「差別はいけない」と考えたり、言ってもいざ自分が関わることになった場合、私は心の底から差別や偏見は絶対にしないと切り切れるか考えました。考えた結果、差別をしない人間になるには大人になる前から差別問題にもっと目を向け理解を深めることが大切だと思いました。なので講演会のあった日の夜に、母と部落差別について話しました。話してびっくりしたことは、私の住んでいる地域の人にも部落差別を受けていた人がいたことです。今まで授業でしか話を聞いたことがなかったので、身近に苦しんでいる人がいたことを知りました。～～（中略）～～なので将来には差別のない幸せな環境を作るためには、私たちがこれから生まれてくる子ども達に差別について、しっかり話していかなければならないと思いました。

小倉好正校長先生にインタビュー

by 3年2組 人権委員

6月中旬のある日の昼休み、お忙しい中、小倉校長先生にインタビューに応じていただきました。以下その様子を記します。



Q 1 なぜ、地歴の先生になりたかったのですか。

小学校・中学校・高校と学校が好きで、その好きな学校に勤めることのできる職業として教員を志望しました。

ただ、高校時代には英語など苦手な教科があり、得意な科目が地理だったからです。

Q 2 様々な人権問題の中で、先生がいちばん関心があるものは何ですか。

障がい者問題です。6月の初旬に、出張で今治特別支援学校に行かせていただきました。また現在私の両親が介護を必要とするようになり、障がい者問題が身近なものになっています。

Q 3 「いじめ」についてどう思われますか。

絶対に許すことのできないことです。人権・同和教育の目的は「命の大切さ」を学ぶことにあると思います。自分の周りの人を大切にできない人は、自分自身も大切にできないと思います。

Q 4 人権に関する、おすすめの本や、映画、歌がありましたら教えてください。

一つは坂村真民の詩集にある「二度とない人生だから」です。「人間の輪」のp6にも載っています。この詩を生徒みんなで読んでからホームルーム活動をしていました。

もう一つは「ひまわりのおか」という絵本です。この本は宮城県の石巻市立大川小学校で、2011年の東日本大震災で児童74人の命がなくなりましたが、母親達が逃げようとした場所にヒマワリを植え始めという本です。



坂村 真民
(1909~2006)

熊本県出身。

終戦後、朝鮮から引き揚げて愛媛県に移住。高校の教員として国語を教え、65歳で退職。58歳の時、砥部町に定住し、92歳で砥部町名誉町民に選ばれる。2006年(平成18年)97歳で砥部町にて永眠。

愛媛県砥部町に「たんぼぼ堂」と称する居を構え、毎朝1時に起床し、近くの重信川で未明の中祈りをささげるのが日課であった。詩は解りやすい物が多く、小学生から財界人にまで愛された。特に「念ずれば花ひらく」は多くの人に共感を呼び、その詩碑は全国、さらに外国にまで建てられている。

伊予郡砥部町に記念館が最近できました。

Q 5 人権教育に関わる中で、特に印象に残っている出来事を教えてください。

数年前に実施した現地学習会です。現地の見学や聞き取りを学んだ時、自分の不勉強に気付きました。

Q 6 小松高校生に対して何かメッセージをお願いします。

キーワードとして「寄り添う」「ともに生きる」ということです。同じ目線で、憐れみや同情でなくということです。

Q 7 先生が今一番はまっていることは何ですか。

初めてこの小松・西条地域で勤務しますので、西条市や小松について学ぶことです。

Q 8 これだけは言いたかったということがありましたら・・・。

生徒のみなさん、創立108年になる母校小松高校を大切にしてください。在校生のみなさんには、卒業生の先輩以上に母校である小松高校にプライドを持ち頑張っていて欲しいです。胸を張って「私は、小松高校生です」といえる生徒であってほしいです。

***** <インタビューを終えて> *****

外に出る機会が多い中、お願いしたインタビューでしたが、時間的に余裕のない中、小倉校長先生は紙面を用意され、丁寧に答えくださりました。先生に教えていただいた各種の本やメッセージは印象的でした。このことを忘れずに普段の行動に生かしたいと思います。